

千年の森便り No.171

2017.10.10

ちば千年の森をつくる会

<http://toyofusajima.html.xdomain.jp/>

代表 坂本文雄

sennennomori@hotmail.co.jp

活動の記録

10月4日(水)曇 秋のきのこ観察会

県立中央博物館の企画展で超多忙の中、今年も吹春先生に貴重な時間を割いて頂いて秋のきのこ観察会が無事に開催できました。参加者は会員+家族15名と一般参加者28名、講師を含め総勢44名、その内豊英島に初めて来た人が20名で、当初の心配をよそに大盛況でした。

都内、横浜、茨城県をはじめ、県内各地から参加の皆様、秋の豊英島の自然を満喫していただけたでしょうか。願わくばこの中から何名でも良いですから当会の仲間に加わって下さるのを期待しています。

9月の危険木処理から当日の裏方作業まで、受け入れにご尽力の会員各位に感謝します。

きのこは期待のお化けコウタケにはお目にかかれませんでした。ますますの出具合だったと思います。やはり豊英島はきのこの宝庫です。(坂本)



きのこに恵まれ、総勢44名参加の大盛況でした

○吹春観察コース

今週は雨模様続き、昨晚も雨が降り、きのこの世界では大いに「我が世の春ならぬ秋」を謳歌していただろう。恒例となったきのこ観察会は初めてのウィークデー開催にも関わらず40名を超える盛況。吹春講師のコースにはその半分以上が加わり、千年広場から祠山をかすめ、ホテイ岬をめぐる比較的安全なコース。

フェアリーリング(菌輪・fairy ring) 広場を出発して間もなく「先生、きのこがいっぱい!」の声に、一同群生したきのこを囲む。「フウセンタケの仲間のオニフウセンタケですね。きのこが連なって丸い輪状になっているのが分かりますか。このようなきのこの発生をフェアリーリングといいます。昨夜はきつときこのたちは妖精のように輪になって踊っていたことでしょう。」と吹春講師。参加者は改めて群生したきのこを見直す。月明かりの中、きのこ・妖精たちのファンタジーの世界に浸る。



オニフウセンタケ(真鍋)



オニフウセンタケの菌輪(中田)



吹春講師の名解説に



聴き入る(中田・真鍋)

バカマツタケ発見 「あれ、こんな道端にバカマツタケがあった。」と吹春講師。一斉に歓声が上がリ、講師の周りに集まる。「こんな道端に今日の最大のターゲットがあってよいんですね!みなさんの心がけがよほどよかったんでしょう。素敵な薫りをどうぞ!」。いつもの観察会なら島中を探しても見当たらず残念というのが当たり前。運が良くして危険な場所によく発見というほどの貴重な存在。香りよし、形よし、そして何より食味良しのきのこ狩りの王様である。20分ほどの行動で出会えた幸せに、みな興奮。



バカマツタケ

次から次へときのこが見つかる ホテイ岬は、水量も多く、湖面には釣り船も数隻浮かんでいた。今回は、きのこにとっては湿り気の多い好条件、吹春講師の深い知識とウィットに富んだ絶妙の解説に聞き惚れながら、あっという間に楽しい2時間が過ぎた。参加者の持つ箆や袋もいつのまにかずっしり重くなり、午後の講評への期待が高まった。(新井孝男)



真剣な眼差しできのこ撮影 (坂本)



ハラタケの仲間 (中田)



アカヤマドリ (中田)



チシオタケ (真鍋)



ヒナアンズタケ (中田)



カキシメジ (中田)



ウスタケ (真鍋)

○バカマツタケ探検コース

山蛭が出るかもしれないので念のためと用意いただいた塩水スプレーを靴に吹きかけている最中に、「長靴でないよね。バカマツタケ取りに行く？」と鶴沢さんに声を掛けてもらいました。

昨年きのこに興味を持ったばかりの初心者ですが、千葉県では松茸がなく、採れるのはバカマツタケというくらいは知っていました。ロープを持った鶴沢隊長の後ろを、どこへ行くのか分からないまま、智貴君、裕士君兄弟と一緒について行きました。ほこら山を越えて禁断の岬へと続く細い道に入ると両側は斜面。下に豊英湖の水面が見えます。さらに岬の先端の方へ進むと、隊長が「何か匂うな。」智貴君も「うん、匂う！」と応じますが、裕士君と私は全く分かりません。斜面を慎重に降りてバカマツタケを探しましたが、下の方では見つかりません。諦めて上に戻る途中、裕士君が発見、ちょっと足場が悪い場所だったので智貴君が採取。お手柄の連携プレーでした。結局、3株のバカマツタケは道からそう外れていない場所にありました。「やっぱな。何か匂ったんだよ。」と隊長は満足そう。鼻先に近づけるとマツタケのいい匂いがしました。さて、きのこは鼻で狩るもの



急斜面のマツタケ狩りは健脚4人組(友塚)



バカマツタケ

だと知った今、鼻の悪い私はどうしたらいいのでしょうか？

ならばと自分にとっての宝物探しに切り替え、発見できたのが、ニガイグチモドキ。過去に自分で見つけたもののなかでは最大級ですしりとした手ごたえに嬉しくなりました。



ニガイグチモドキ

(記事、画像とも佐倉市 友塚新樹)

○講師レクチャー要旨

いつも使っている孢子の色で分けた資料の順番で、吹春講師の解説が進められた。

孢子の色が白からクリーム色のベニタケ科は、乳液が出ないルストラ (Russula)、乳液が出るラクタリウス (Lactarius) がある。森の中では有力な外生菌根菌。ブナ科の林では、ときにきのこ全体の重量の半分を占めることもあるくらい、森の中で優占する科であるが、学名がついている種の割合は少ない。

ヌメリガサ科で覚えておかなければいけないのはサクラシメジで、房総のコナラ林を代表する菌。今回も数本見られた。色とやや垂生するヒダが特徴。



サクラシメジ (真鍋)



カキシメジ (真鍋)



シャカシメジ (裕土君)



ウラベニホテイシメジ (坂本)

キシメジ科では、バカマツタケ、カキシメジ (毒)、ミネシメジが今回沢山とれた。

また豊英島で初めてシャカシメジが見つかった。特にバカマツタケは今回いつもの年より多く出ており道端でも見られた。ニセマツタケと同じ場所に生えるが、黄色味が強く柄がずん胴であり、なによりマツタケ様の香りがある点で見分けられる。カキシメジは、中毒事件が多いきのこのなので特徴を知っておくべき。だが類縁種が多数あると思われるので特定するのが難しいときもある。中島淳志氏によるとグアヤク脂で断面を染色すると緑色になるという。シャカシメジは、千葉では珍しい。昨日の君津市折木沢での観察会でも発生しており、今年は多い年なのかもしれない。

テングタケ科は、タマシロオニタケ、コテングタケモドキやコトヒラテングタケ、ミヤマタマゴタケなど多くの種類が見られた。食用菌もあるが、猛毒のものを含むので注意が必要。形態ではっきり区別できるのでキノコの入門によいためぜひ覚えてほしい。

イッポンシメジ科で覚えておかなければいけないのがウラベニホテイシメジ。カサの表面に指で押したような模様があるのが特徴でかじると苦い。

旧ヒトヨタケ科ではミヤマザラミノヒトヨタケが採れた。

モエギタケ科では、ニガクリタケ (毒) が見つかった。中島淳志氏によるとニガクリタケは紫外線を当てると光るとのこと。クリタケと区別するのに有効との話だった。フウセンタケ科はヒダが鉄錆色に成熟する (孢子の色)。今回多数採れたオニフウセンタケは、ニューギニアのセイ・カシ林でもみられる。千葉の森とニューギニアの森が繋がっていることを示すもの。



ニガイグチモドキ (友塚)

イグチ科は、最上の食菌と言われるアカヤマドリが何本か採れた。その他ヤマドリタケモドキやニガイグチモドキ、クリカワヤシャイグチ、キクバナイグチの仲間などが見られた。

腹菌類はヒメツチグリの仲間、ノウタケなどが採れた。

その他のきのことして採れたのは、食菌として有名なクロカワが 1 本。また大型の従来フジウスタケと同定していたウスタケ属の不明種は多数採れた。今回多数採集できたホウキタケの仲間は分類がすすんでいないため名前が付かない。またベニチャワソウタケモドキの生えている枯材が備長炭のように固くなっているのを観察した。これはベニチャワソウタケモドキが材を独占するため、他の菌が入らないように、自らの菌糸で材の表面をコーティングすること、すなわち“偽菌核”をつくっているためである。(中田真也子記、吹春講師監修)

豊英島キノコ観察会に参加して

佐倉市 森崎一三

佐倉から参加させて頂きました。この島への初訪問は5月の新緑の観察会でしたが、今回のキノコは初めて。未知の世界にドキドキしてきましたが、その期待をはるかに上回る楽しく貴重な体験でした。森の奥に蠢く沢山の生き物の息づかい。動物と植物と茸の連鎖。アカヤマドリの勇姿。また妖精たちのダンスというフェアリーリングには一番興奮しました。忘れられないのはベニチャワンダケ。備長炭のような真っ黒な木片に付く赤い小さなキノコ。人智を越える不思議さに気が遠くなりそうでした。また貴重なコウタケ、バカマツ等にも触れる事が出来ました。まだ解明されない自然界の不思議がまだまだいっぱいあることを学びました。研究者の中島さん（傍らのご婦人が小泉進次郎似だねと言っていました）とご一緒出来た事も収穫でした。若いのに博識で熱心で謙虚。彼の著書をすぐ購入しました。吹原先生が冒頭の挨拶で「僕が来る時は茸が不作」と言って笑いを取っていましたが、この日はさにあらず、

誰かが「今日は久しぶりの大漁だ」と叫んだことが印象的で、参加出来て誠にラッキーでした。吹原先生の丁寧親切なご説明、温かいお人柄に触れることができ、とても楽しい一日でした。最後に坂本代表はじめお世話頂いた会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

千年の森秋のきのこ観察会に参加して

横浜市 中島淳志

普段私が拠点にしている神奈川では見られないようなきのこ（「バカマツタケ」など）をたくさん見る事ができました。「ミネシメジ」や「オニフウセンタケ」が大量発生している光景も、これまで見たことがありません。巨大な「ニガクリタケ」も個人的には印象的でした。

普段人が入らない、保護された森ということで、独特なきのこ相が発達している雰囲気を感じました。とても貴重な自然だと思います。

【私が使っていた道具について】

ディノライト（Dino-Lite）という、パソコンのUSBに挿して使用するタイプの拡大鏡です。美容室で毛穴や肌年齢をチェックするのに使っているのを見て、きのこ観察に応用できないかと考えました。これを使うことで、従来屋内で実体顕微鏡を使わないとできなかったような詳細な観察が簡単にできるようになりました。写真もクリック一つで撮ることができます。動画も撮れます。価格はAmazonで15,400円です（2017年10月4日現在）。現在、様々なきのこの「ひだ」と「管孔」の拡大写真を大量に収集しています。これらの写真を使って、いわゆる「人工知能」を開発しております。うまくいけば、Dino-Liteをきのこに当てるだけで、一瞬できのこの名前が表示される仕組みが作れるかもしれません。今日マツの材に生えていた「サケバタケ」のひだの拡大写真を添付いたします。



きのこの赤外線識別法説明（真鍋）



サケバタケのひだ撮影（中田）



サケバタケのひだ拡大写真

（注）中島淳志さんは今年9月「ナツメ社」から「しっかり見わけ観察を楽しむ きのこ図鑑」を出版されました。中島淳志著、吹春俊光監修、大作晃一写真です。「識別」と「同定」に重点をおいた解説と、従来の図鑑にはあまりなかったグループ（科や属）ごとの詳細な解説が特色です。1万5千件の膨大な文献データ（記載文）を解析した結果を基に、きのこが持っている多数の特徴の中で、識別に特に重要なものを浮き彫りにしています。この他にサイズ、色、発生時期をグラフとして可視化しており、きのこの主要なグループを一目で把握することができます。（真鍋）

（注2）今回参加された柏市の氏家文憲さんは翌10月5日、ブログ「楽山楽水日記」に千年の森きのこ観察会の模様を投稿されました。臨場感溢れる楽しい記事です。ご一読をお勧めします。（真鍋）

バカマツタケの事

豊英島のきのこで注目され、いつも話題になるのはバカマツタケです。

色と形は本家の松茸を半分に以下に縮小コピーした様にそっくりですが、味は同等で香りは逆に数倍強く本家に勝ります。当日は岬の先端まで探索した鶴沢さんグループが数本採取してくれましたから全員がその芳香を楽しめたと思います。鶴沢さんは「プーンと独特の香りがしたから辺りを探して見つけたんだ」と鼻をぴくつかせて自慢していました。

私も当日、行事が始まる前に別の山を歩いて数本採取しましたが、最初の発見はやはり香りが決め手でした。ただし、箆に入れて持っている、それが自分の近くで強烈に匂うので次の一本を探すのに鼻は役に立たず、目が頼りになります。

バカマツタケは吹春先生の師匠格の本郷先生が名付け親で、世界共通の学名も

Tricholoma bakamatsutake Hongo です。馬鹿の由来について図鑑の解説では、季節外れにしかも松林ならぬ雑木林に生えるからだと書かれていました。(坂本)

10月4日 千年の森さのこ記録

(栗山記録、監修未済)

アカヤマタケ属	コテングタケモドキ	ニガクリタケ
アカヤマドリ	コトヒラシロテングタケ	ヌメリガサ属
イッポンシメジ属 3種	サクラシメジ	ネンドタケモドキ
ウコンハツ	シャカシメジ	ノウタケ
ウスタケ	シラケシメジ	バカマツタケ
ウスタケの仲間	シロオニタケ	ハカワラタケ
ウスヒラタケ	シロゲシメジ(仮)	ハナヒラニカワタケ
ウラベニホテイシメジ	スミゾシメジ?	ハラタケ属
オオツルタケ	タマゴタケモドキ	ヒメツチグリ属
オニフウセンタケ	タマシロオニタケ	ビョウタケの仲間
カイガラタケ	チシオタケ	フウセンタケ属
カキシメジ	チチアワタケ	ベニタケ属
カクミノシメジ?	ツエタケの仲間	ベニチャワンタケモドキ
カバイロツルタケ	(ツヤ)ウチワタケ	ホウキタケの仲間
キクバナイグチの仲間	テングタケ	ホコリタケ属
キシメジ属	ドクツルタケ	ミネシメジ
キチチタケ	トビチャチチタケ	ミヤマザラミノヒトヨタケ
クサウラベニタケ	ナラタケ	ミヤマタマゴタケ
クリカワヤシャイグチ	ニガイグチ属	ヤシャイグチ
クロカワ	ニガイグチモドキ	ヤマドリタケモドキ?



ウラベニホテイシメジ (坂本)



シャカシメジ (坂本)



サクラシメジ (真鍋)



チシオタケ (坂本)



オニフウセンタケ (中田)



バカマツタケ (真鍋)

クロコタマゴテングタケ
クロハツ
クロハツの仲間
クローパタケ
ケロウジ
コウタケ
コシロオニタケ

○植物記録

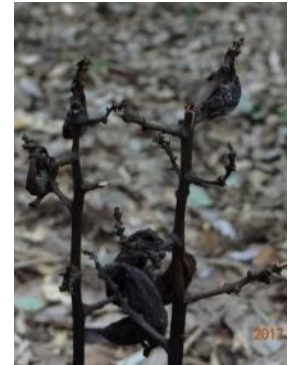
ネズミノオ 栗山さんは千年広場から吊り橋に向かう通路でイネ科 **ネズミノオ**を見つけました。多分人間が種子を運んできたものと推定されます。これにより、豊英島の植物種は延べ361種になりました。

(シダ植物含む、未確認種を含む)

クロヤツシロラン クロヤツシロランの開花時期なので、30分ほど新井道子さんと花を探しましたが見つかりません。昨年10月1日のような人海作戦で林床を徹底的に探さなければ、見つけれないようです。



9月18日



10月4日

ツチアケビ 9月に7個の赤い実をつけていたホテイ岬のツチアケビは、赤い実が全て無くなり、黒変して枯れた実のみ約20個つけていました。赤い実が鳥や動物に食べられたのか、それとも全て黒変して枯れたのかはわかりません。

ヒメコマツ柵内のツチアケビは9月同様赤い実2個つけていました。

ツチアケビの今年のモニタリング状況を更新し、千年の森ホームページに掲載します。(真鍋)

○センサーカメラの画像から

吊り橋上に設置のセンサーカメラに、サル、タヌキ、テンの画像がありました。

サルが写ったのは濃霧の中で不鮮明ですが、タヌキとテンは比較的良好に撮れていました。

ただし、画面の隅だったり、後ろ向きや全身の一部が欠けているのは何時もの事です。自動撮影の運用ですから仕方ありません。技術の進歩で動物を追尾して撮影できるなら楽ですが、ますます人間が墮落しそうで怖い面もあります。(坂本)



テン 9月27日



タヌキ 9月19日

野鳥の記録は時間が無くて取れていませんが、カケスの声が聞こえましたから冬に備えて団栗の貯食をしているのかなと思いました。これも秋の風情です。(坂本)

お知らせ

○11月の定例活動日

11月19日(日) 9時30分、君津市自然休養村管理センターに集合、ホテイ岬地区整備 ホダ木伐採、植物・野鳥調査など予定しています。